

# 水曜通信 3

東北学院宗教センター編

2020年  
11月

LIFE

LIGHT

LOVE



東北学院大学 多賀城キャンパス  
礼拝堂ステンドグラス  
直径 240cm

多賀城キャンパスにある1983年竣工の礼拝堂のステンドグラスで、世界の始まりを描いています。『創世記』冒頭の「初めに神は天地を創造された」をモチーフに、渦巻く混沌から世界が誕生する様子です。

## 音楽による賛美

東北学院の水曜公開礼拝が9月から再開されました。ただしYouTube配信で、11月は3回目です。礼拝のあとは音楽による賛美です。そこで、音楽による賛美についてお話します。

礼拝は「神の国」の先どりです。イエス様は「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、私もその中にいる」とおっしゃいました（『マタイによる福音書』18:20）。またルターは『卓上語録』のなかで、地上での音楽礼拝がこれほど素晴らしいのなら「すべてが完全で、喜びに満ち溢れた永遠の生においては何が起こるだろうか」と言っています（4192番）。

コロナ禍で人々の出会いが制約されて、必要なのは絆であり祝祭であることに改めて気付かされました。有限なものではなく、神様また音楽を介した祝祭こそが地縁血縁を超えて、すべての人々をつなげます。いずれ実際に集まれる日が来ることを望み、今できることに専念しましょう。



研究ブランディング事業担当 鐸木 道剛

次回：第37回水曜公開礼拝(公開オンライン礼拝)11月18日配信予定

学校法人東北学院ホームページ「新着情報」よりご覧いただけます。

【第1部 礼拝】 説教：大西 晴樹（院長・学長、宗教センター所長）

奏楽：菅原 淑子（本学礼拝オルガニスト）

【第2部 オルガン演奏による賛美】

演奏：菅原 淑子

## 第36回 水曜公開礼拝報告（説教：鐸木 道剛、奏楽：小野 なおみ）

2020年10月21日（水）「聖書の学びとオルガンの調べ」 公開オンライン礼拝

讚美歌：187番「主よ、いのちの」  
聖書：ヨハネによる福音書 4章21-24節  
使徒言行録 17章22-25節  
讚美歌：452番「ただしく清くあらまし」  
説教：「異邦人への福音」  
頌栄：544番「あまつみたみも」



### 【説教要旨】

サマリアの女は、ユダヤ人から一番近い異邦人。我々日本人は一番遠い異邦人でしょうか。イエスは彼女に三つのことを言います。特定の「神の国」はないこと、つまり人々がイエスの名によって集まるところが聖地であること。また超越の神であるなら二つとなく、同じ神であること。その神への祈りは偶像崇拜でなく、霊と真理によるまことの祈りであること。この三つです。サマリアの女は、イエスをメシアと信じます。つまり人であるイエスが同時に超越的な神であることを認めることによって、現実が「神の国」につながります。サマリアの女にとっても同様、我々にとっても全く同じ福音です。（文学部 鐸木 道剛）

前奏：G. ベーム(1661-1733) コラール編曲「天にまします我らの父よ」

後奏：F.メンデルスゾーン(1809-1847) W.A.C. Cruickshank編曲 交響曲第2番 第1部より「マエストロ・コン・モート」

## 礼拝後、小野なおみ演奏によるオルガンの調べ ～鈴木雅光の作曲・編曲作品による～

1. いつくしみ深き（コンヴァース作曲／鈴木雅光編曲）
2. Trace（鈴木雅光作曲）
3. ロンドンデリーの歌（アイルランド民謡／鈴木雅光編曲）
4. 祈り～「感謝」（鈴木雅光作曲）

オルガンの穏やかで柔らかい音色に包まれながらリラックスして聴いていただければと思います。選曲しました。「いつくしみ深き」は有名な賛美歌ですが、私なりの和声に置き換えて編曲しています。「Trace」は美術家の細川憲一氏の絵画作品に捧げ作曲したもので「残像」という意味の題名は氏の技法を象徴しています。

アイルランド民謡の「ロンドンデリーの歌」の美しいメロディーは賛美歌としても歌われています。音色的に変化のある編曲となっています。「祈り～「感謝」」はごく個人的に作曲したピアノ曲をオルガンのために書き直したものです。これらの曲は宗教的な目的で作・編曲したものではありませんが、曲をつくる時、私の中では常に「祈り」を感じています。聴いてくださる皆さまそれぞれに、自由に何かを感じていただければ幸いです。オルガンの音色設定に時間を費やして下さった小野なおみさん、水曜礼拝の運営に力を尽くして下さったスタッフの皆さまに心から感謝を申し上げます。

（東北学院中学校・高等学校教諭 鈴木 雅光）

今回「オルガンの調べ」として収録したのは、昨年11月の水曜礼拝後に演奏したプログラムと同じものです。譜面を頂いたのは昨年の春頃でした。編曲作品は元の曲調を活かしつつ和声と曲の構成に新鮮さを感じ、オリジナル作品は私の専門でもあるフランス近現代の技法も見え、心が躍ったのと同時に非常に大きな責任を感じたのを覚えています。

本番前のリハーサルでは、音色作りに時間を割きました。より良い音色のバランスを求めて試行錯誤したことは、15年以上この楽器に携わる私にも新たな発見をもたらしてくれました。今回の録画ではその音色の操作を鈴木先生が巧みに行って下さった様子も見ることが出来ます。収録では大変緊張してしまった為、演奏に少々悔いも残りましたが、作品を通して鈴木先生の暖かい優しいお人柄を感じる事が出来たと思います。是非オルガンの音色に身を委ね、深い瞑想の世界をお楽しみください。（礼拝オルガニスト 小野 なおみ）



## 東北学院の草創期 (2) 「だれが?①」



押川方義



W.E.ホーイ

創立に関わる「だれが」という問いについては、創立したのは誰かと、最初にいた生徒は誰かとの二つに分けてみたいと思います。

まず、創立したのは誰か。前号の『東北文学』の記述のとおり「押川、ホーイの兩先生」です。

押川方義は、幕末に四国松山藩子として生まれ、明治維新後に洋学(英学)を学ぶために上京した時にキリスト教信仰へと導かれ、横浜で洗礼を受けました。当時日本はまだキリスト教禁令下にありましたが、押川は「キリストによる日本の救い」を志に抱き、新潟を経て仙台を伝道の拠点として、東北各地、北海道にまで活発な活動を開始しました。

ウィリアム・E・ホーイは、押川の8つ年下で、アメリカ東部ペンシルヴェニア州の農家に生まれ、伝道者を志してランカスター神学校を卒業し、外国伝道局の3人目の日本派遣宣教師に選任されました。

1885(明治18)年12月、ホーイは来日して3日後に横浜で押川と出会い、翌年1月早々には仙台に移り、学校設立を模索します。当時、押川は36歳、ホーイは28歳。二人の運命的な出会いとホーイの迅速な意思決定なしに、仙台神学校の創立はあり得ませんでした。

(東北学院史資料センター 日野 哲)

## 一 建築との対話：礼拝堂建築調査の現場から (9) 一

緩やかな勾配天井が包む大らかな空間と、緻密な細部意匠。長い年月が育んだ歴史の重み。これらが織り成す荘厳な空間は、何と言っても礼拝堂の最大の魅力です。

一方、こうした優れた空間は、たくさんの脇役に支えられて成り立っています。とりわけ歴史的建築を彩る重要な脇役の1つに、金物類の存在があります。ときに建築以上に時代を感じさせる金物は、それ自体としても文化遺産と言えるでしょう。こうした観点から、現在、研究室の学生たちと一緒に、礼拝堂に残る金物や家具などの悉皆的な調査を行なっています。

例えば、玄関ホールから礼拝堂へ至る扉の上部に、献堂当初からの米国NORTON社製のドアクローザーが遺ります(右図)。NORTON社は、Lewis C. Nortonによって米国ボストンにて1880(明治13)年に創業された会社で、ドアクローザーの生産・販売を行なった世界で最初の会社と言われています。礼拝堂に使用されているものには、これが1930(昭和5)年製モデルであることを示すプレートと、大きさ(支えるドアの重量に応じて)を示すと見られる「B」の記号を確認できます。米国人設計者のJ.H.モーガンが、米国の老舗メーカーから、当時としては新しいモデルを輸入して設置したことを示しています。90年に渡って扉を支えるドアクローザー。建築には、細部にもまた多くの物語があります。



献堂当初からのドアクローザー

(工学部 崎山 俊雄)

## 「ランカスター神学校の思い出」(1)

皆さん初めまして。今年度より総合人文学科に着任した藤野雄大と申します。今回、初めて水曜通信のコラムを執筆させていただくことになりました。今回は、本学とも関係の深いランカスター神学校に滞在していた時のことを記したいと思います。

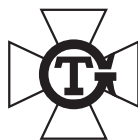
私がランカスター神学校に滞在していたのは、2015年の7月から10月半ばのことでした。日本から遠く離れたランカスター神学校に滞在することになったのは、資料収集のためでした。私の主要な研究テーマであるマーサーズバーグ神学という神学運動が展開されたのが、ランカスター神学校の直接のルーツであるドイツ改革派教会の神学校だったため、同神学校には、今日でもマーサーズバーグ神学に関わる貴重な史料が多数保管されています。それらの史料の中には、マーサーズバーグ神学を主導したジョン・W. ネヴィンやフィリップ・シャフの書簡も含まれています。そのため、私にとっては、ランカスター神学校はいわば「聖地」であり、「宝物庫」のようなものでした。図書館や資料室に長時間入り浸っていたことを思い出します。

「聖地」ランカスター神学校に滞在している間、至るところで、ネヴィンやシャフを身近に感じることができ、天にも昇る気持ちでした。図書館にはネヴィンやシャフの肖像が飾られ、神学校の脇にはネヴィン・ストリートという道がありました。さらに学校のWi-Fiのパスワードにまでネヴィンの名前が含まれていました。

マーサーズバーグ神学は、アメリカの教会ではそれなりに注目されていますが、世界的認知度は高いとは言えません。それを専門的に学ぼうとする日本人が来たことは、ランカスター神学校でも驚きであったのでしょうか。キャロル・リッチ学長（当時）を始め、皆さん、とても親切にくださり、資料収集の際にも惜しみなく協力してくださいました。特に貴重だったのが、ランカスター神学校の教授であり、マーサーズバーグ神学の碩学であるアン・タイアー教授とリー・バレット教授から個人指導を受けることができたことです。

また当時、図書館の在庫整理を行っていたのか、マーサーズバーグ神学に関する貴重な研究書が格安で販売されていました。すでに絶版になっており、日本では入手困難な書物が、ほとんど捨値のような価格で買ったことは本当に幸運なことでした。この時に購入した書籍は、私の宝物となっています。

(文学部 藤野 雄大)



いのち

ひかり

あい

東北学院スクールモットー  
LIFE LIGHT LOVE (いのち・ひかり・あい)

東北学院宗教センター編「水曜通信」  
第3号

2020年11月12日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1

発行責任者：宗教センター主任 野村信

編集協力者：鎌木道剛

東北学院宗教センター TEL：022-264-6558

Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp